

新連載

舞鶴の歴史をたどる

Vol.2

いち いちぼ
市 (市庭・市場)

舞鶴市文化財保護委員 高橋 聡子

市は物の交換・売買取引が行われる場所で、市庭・市場ともいいます。もともと人々が物々交換する目的で、村境に立てられたものですが、市の語源が神の祭祀＝斎（いつき）の転訛したものとされ、市立自体が神仙の営みとみなされて、祭儀とも結びつき発達しました。

市は、人々が社会の束縛から解放され、未知の世界と交換する出会いと娯楽の場であり、古代の歌垣や中世の踊り念仏が示すように「祝祭的熱狂が支配する非日常的な時空」でもありました。人々が集まるところから、芸能民や宗教者のかっこうの活動の場となり、また罪人の首がさらされる処刑公開の場ともなりました。市はその境界性から、ある領主の支配下におかれにくい平和な領域としての性格をもち、そこでは喧嘩論、押売押買などの暴力行為が禁じられ、市へ来る者は債務の徴収や犯罪の追及から保護されています。

平城京（奈良）・平安京（京都）には官設の市が設置されました。地方でも中央に貢納する調庸物・雑物の購入調達のために■府近くに、また年貢・公事物調達めぐって庄■内に市が開かれ、干支にちなんで辰市・酉市などと呼ばれていました。

鎌倉時代になると農業生産力の向上、庄■村落内における手工業の勃興、宋銭の大量流入などにより、銭納をするための年貢物販売や農民層の参加もあって、多くは月三度の■切市ながら■府・

寺社門前・庄■政所前・宿駅や港湾などに開かれました。やがて市の開催場所が固定し、市場在家と呼ばれる商工業者・農民が定住しはじめて月六度の六斎市が立つようになります。中世の定期市を三斎市・六斎市と呼んだのは、仏教の行事と関連して斎日（ものいみする日）に市が開かれたことに由来するのでしょうか。

六斎市は近世には各都市の町屋店舗や卸売市場に吸収されていくこととなりますが、市のもう一つの側面である娯乐的・祝祭要素は歳市や寺社の縁日市に継承され、あびす市・達磨市・夜の市などの名で現在もなお人々の欲求を満たす役割を果たしつづけています。

■良川は古くより丹後と丹波を結ぶ重要な水路でした。■良川右岸の三日市は三の付く日に市が立ったことを示しています。かつて河守街道は右岸を通っており、大川神社の参詣は三日市から舟で渡ったものでした。

西地区中筋の七日市も三斎市による名で、小字に市中・市ノ前・市ノ上などが残ります。天正8年（1580）海際に城が築かれるまでは、この地は■辺郷の中心に位置していました。真倉川（伊佐津川）と池内川の自然堤防上にあつて、河守・宮津方面、若狭・上林、また京へと各方面へ通じる街道の起点となっていました。高野川流域も含む領域の庄■領主への年貢・公事物はこの市で銭に変えて納められたはずです。

東地区の「市場」も中世に開かれた市町です。若狭街道沿いの志楽川■に位置しますが、南北朝より南都西大寺領志楽庄の中にありました。永徳3年（1383）の文書の中に「在所志楽市場」と出ています。年貢等を代銭納していますから、この市場で換金したものでしょう。そして■常生活に必要な農具、鍋・釜、食器となる焼物・漆器、衣類、武具そして魚貝・海藻、鳥、酒、薪炭などを買い求めました。近世においても、志楽市場は米その他物産の積出し港として、また宿場町として賑わっています。元禄2年（1689）■原益軒の旅行記に「四六（志楽）市場 ■辺より二里半 民家三十軒ばかり有り。甚だ矮陋（わいろう一家などが小さくてむさくるしい）なり。今夜はここに宿す。此辺に入海有り」とあり、牛市が天保14年（1843）に創設されて、明治7年（1874）まで毎年44頭～100頭の取引があったようです。



鎌倉時代の備前■福岡の市（岡山県長船） 市の日には小屋も建てられ、布や米・魚などを売買する人々にぎわった。しかし、市の立たない日は寄る人もなく閑散とした風景となる。 「一遍上人絵伝」 京都 歡喜光寺蔵